『VIEW21』がカリキュラム・マネジメントのワークショップを開催

実践! 対話やエビデンスを基に、課題や目標をいかに共有するか

2019年3月、『VIEW21』高校版が主催する、カリキュラム・マネジメントのワークショップが開かれた。学校改革や指導改善に対する熱い思いを持った高校教員42人が全国から集まり、学校・立場・教科などの違いを超えて対話をしながら、カリキュラム・マネジメントへの理解を深め、自校での具体的な展望を考えていった。

学校を超えて悩みや考えを共有 実際に行動・継続できる研修に

「カリキュラム・マネジメント（以下、カリマネ）の進め方が分からない」「実践に消極的な教員が大半で、着手できていない」――高校でもカリマネの推進は大きな課題だ。『VIEW21』高校版の読者アンケート[*1]では、カリマネの実施率は25%で、今後実施を予定している割合は63%だった。そうした現場を支援しようと開かれたのが、今回のワークショップだ。

プログラムは3部構成（**次ページ参照**）。［第1部］でカリマネの概要をつかんだ後、［第2部］では3つの分科会の中から各自の関心に応じて1つを選んで参加。［第3部］では、第1・2部での学びを踏まえて、自校でのカリマネの実現に向けた行動計画を作成した。

今回のワークショップの特徴は、ワーク・対話・共有といったアウトプットを重視したことだ。カリマネは一部の学校で実践が始まったばかりで、誰も明確な答えを持っていない。そこで、1グループのメンバーを学校・立場・教科・教職歴が異なる5～6人で構成し、メンバー同士で思いや実践を話し合う形とした。そこで得た気づきや考えたことを言語化して共有する過程を大切にすることで、参加者それぞれが答えを見いだせるようにした。

また、当日の学びを生かして行動に移すまでが重要であることから、各自が学校に戻ってからの行動計画を立てた。それを他のメンバーが見守り、励まし合えるようにグループでの行動計画も立て、ワークショップ終了後も対話が続くよう、各自の進捗を報告したり、相談したりする場としてSNS上に専用のオンライン会議室を設けた。

カリマネを全校に浸透させていくポイントは？

講演や分科会で3人の講師が繰り返し伝えていたのは、生徒の課題や学校教育目標を可視化し、対話を軸に校内で共有することの重要性だ。教育活動の改善を図るために行うカリマネは、管理職や担当教員だけではなく、教育活動に携わる一人ひとりの教員が取り組むべきことだからだ。

自校の学校教育目標を見直す過程を報告した静岡県立御殿場（ごてんば）高校の美那川（みながわ）雄一先生は、そのきっかけについて、「職員室での雑談で、教科書に書かれている文章を理解する読解力に課題がありそうだという話になり、まずは5教科の担当教員で改めて課題を共有する場を設けた」と語った。

関西大学の森朋子教授は、美那川先生の事例に言及しながら、課題や現状を複数の教員間で共有する際には、エビデンスを土台にすることが重要だと述べた。

「生徒の読解力をどう感じるか、その基準は先生によって異なります。感覚で話すのではなく、誰もが納得するエビデンスを示すことが、カリマネを進めるポイントの1つです」

岡山県立林野（はやしの）高校の三浦隆志校長は、自校での取り組みで、最初は「カリマネ」という言葉を意図的に使わなかったと語った。

「現状を整理し、解決すべき課題に優先順位をつけて、この多忙な状況を変えませんかとアプローチしました。先生方はPDCAサイクルは知っていますし、個々に指導改善に取り組んでいます。それをきちんと形にしていくと説明しました」

プログラムの終盤では、「SNSで月1回、互いの進捗を報告し合う」「分からない点は気軽に質問する」など、今後もメンバーで協力する決意が示されていた。参加者は、新たな仲間を得て、自校でカリマネを進める知恵と勇気を得たようだ。

『VIEW21』高校版の6月号では、今回のワークショップを詳細にリポートしています。ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧ください。

VIEW21　高校版　検索

＊本文中の講師のプロフィールは、ワークショップ開催時（2019年3月）のものです。
＊1『VIEW21』高校版「次年度誌面に関する読者アンケート」結果（アンケートは、2017年10月にウェブとファクスで実施。回答数は699）。

「生徒の学びをデザインするカリキュラム・マネジメント」ワークショップ概要

■日　時　2019 年 3 月 23 日（土）　10 時 30 分～ 17 時 30 分
■会　場　ベネッセコーポレーション岡山本社
■講　師　関西大学教育推進部 教授 森朋子／岡山県立林野高校　校長　三浦隆志／
静岡県立御殿場高校 教諭 美那川雄一
■参加者　全国の高校教員 42 人
■プログラム

時間		プログラム	内容
20 分	第1部	課題・目的の共有	カリマネの実施状況、カリマネに対する現場の声などを紹介し、ワークショップの目的を改めて伝える。
20 分	第1部	グループ結成ワーク	アイスブレークとして自己紹介をし、グループ名を決める。
20 分	第1部	関西大学・森朋子教授の講演	カリマネを行う背景と目的、教育のＰＤＣＡサイクルのモデル、カリマネ成功のプロセス、学習モデルの説明、学校教育目標の意味を説明。
30 分	第1部	静岡県立御殿場高校・美那川雄一先生の事例紹介（写真1）	御殿場高校ではどのようにカリマネを進めているのか。美那川先生が課題意識を持った発端から、その後、他教員を巻き込んだ取り組みに発展させた過程を紹介。
30 分	第1部	グループワーク（写真2）	美那川先生の話で、各自が抱いた共感・違和感・疑問・不安をグループで共有。美那川先生に聞いておきたい質問をグループとして2問考える。
30 分	第1部	美那川先生との質疑応答	各グループからの質問に、美那川先生が回答。
50 分		昼食	
90 分	第2部	テーマ別分科会	「学校教育目標のブラッシュアップ」「カリマネと評価のあり方」「カリマネを学校全体に浸透させるポイント」の3つの分科会のうち、参加者は1つを選んで参加。
30 分	第2部	グループ内で各分科会の内容を共有	グループに戻り、分科会の内容やそこで感じたこと、気づいたことをメンバーに説明。他のメンバーは疑問点を質問し、3つの分科会の内容を共有する。
20 分	第3部	個人のカリマネ行動計画の作成（写真3）	学校全体や学年団、教科団が○年後または○か月後、こうなってほしいという姿を設定し、その実現のために自分が明日からできることをシートに記入する。
15 分	第3部	グループ内で個人のカリマネ行動計画を共有	個人のカリマネ行動計画をグループで発表し合い、共有する。
15 分	第3部	グループのカリマネ行動計画の作成（写真4）	個人のカリマネ行動計画シートを模造紙に貼り、それを見て、メンバー同士がどのように見守り、励まし合うか、グループとしての行動計画を立て、模造紙に記入する。
15 分	第3部	グループを超えて今日の学びの成果を共有	各グループの模造紙を見て回る。
15 分	第3部	グループ内で他グループから得た学びや感動を共有	他のグループの模造紙を見て、その内容や感じたこと、気づいたことをグループ内で共有する。

写真 1　講演では、気づきを可視化し、後でグループで共有できるよう、共感した点、違和感・疑問・不安を持った点をメモしながら聞いた。

写真 2　グループワークでは、気づきや考えを書いたり話したりと、アウトプットの場を多く設けた。対話が次の気づきを生んでいく。

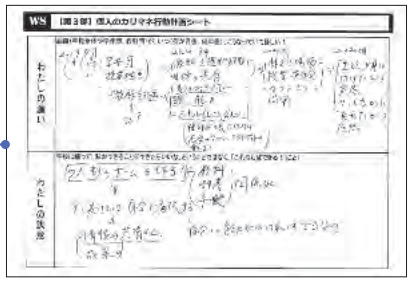

写真 3　学校に帰ってから行動に移せるよう、カリマネ行動計画シートに「わたしの願い」「わたしの決意」を書き込んだ。

写真 4　ワークショップ終了後もメンバーが関係を持ち続けられるよう、グループとしての行動計画を立てた。

参加者の声
（いずれも 20 ～ 50 代の高校教員）

カリマネを難しく捉えていたが、講演でのお話や他校の状況を聞き、少し肩の力を抜くことができたのがよかった。

現状を一気に変えるのは、やはり難しい。校内に対話ができる仲間を増やしていき、その仲間と少しずつ取り組んでいくことが重要だと分かった。

前向きな先生方が集まると、ものごとが勢いよく進む駆動力のすごさを感じた。終始、有益な対話がなされ、様々な化学反応が起き、メンバーがそれぞれ答えを見つけ出していた。同様のことを学校の中で起こし、先生方を縦横の糸で紡いだ 1 枚の布にし、生徒を多面的に包むようにしたい。

管理職や教務部、若手など、立場や環境が異なる教員がメンバーにいたので、様々な視点からカリマネの進捗状況を見ることができてよかった。

事前に課題に取り組んでいたため、グループワークでは対話に集中できた。メンバーからの意見で、自校での取り組みに具体的な展望を持てたことが何よりよかった。

ワークショップの内容を持ち帰って、管理職と教務部長、進路部長に報告し、カリマネを推進することに快諾を得た。各学年主任や副主任ともワークショップで学んだことを共有し、1 学期中に学校教育目標を策定できるように取り組みを進めている。